

ラクゴ・ザ・フューチャー

第八十一回…
**仕事の愚痴を聞かせる回
(すまん)**

文…田中啓文

五回にわたっておおくりした特別教養講座(強要というはなしもあるが)「上方落語の歴史」だが、前回でやっと最終回になったので、今回からは平常どおりの営業に戻るつもりだったが、皆さん、ちょっと私の愚痴をきいてください。愚痴というのは仕事のことである。ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつ……。

いやー、終わった終わった。何が終わったかというと、昨年の九月ぐらいから続いていた綱渡り生活のこと。しめきりが数珠繋ぎのように連続してあり、ひとつの仕事が少しでも遅れると、つぎの仕事が遅れ、結局、ドミノ倒しのようになバタバタと後ろへ後ろへと遅れが広がり、ついにはすべてがパーになってしまう……という怖ろしい怖ろしい状況だったのだ。こういう事態にぶつかった場合の解決法としては、目の先の仕事のしめきりは絶対に守る(出版社が言ってきたしめきりではなく、自分が自分に設定したしめきりである)。それが少しでも遅れたら、つぎの仕事をできるだけ早くこなす。こどもでも思いつきそうな「解決法」であるが、はつきり言ってこれしかないのである。私のような吹けば飛ぶような将棋の駒的作家にとって、原稿を落とす(つまり、すんません間に合いませんでしたがんばったんだけどできないものはできないんですごめんなさい次回がんばるから許してね……)ということはある。次回がんばるからといって次回はないのである。替わりはいくらでもいるわけで、「あつ、そう、

しめきり守らないんだ。じゃあ、あなたにはもう頼みませんから」ということになる。よく、雑誌の発売が。。日なのに、その何日かまえにやっと原稿を入れた、とか自慢げに言ってる(本人は自慢のつもりはないのだろうが、どうしても自慢に聞こえる。だって、それだけ偉いということですから)作家もいるが、これも私にはありえないことだ。そんなぎりだと、ゲラも出ないし、編集者の直しも入らない。多くの作家は、百パーセントの完成品を編集者に渡しているわけで、だから、少しでも赤を入れられるといやがる人もいる。これで完璧な状態なんだから、一字一句変えるな、ということだろう。しかし、私はそうではなく、だいたい七割がた完成した状態で渡すことにしている。あとはふたりで相談して決めましょう、というわけだ。プロなんだからそんな他人任せでーする、というお叱りのこえもあるだろうが、そのほうがおもしろくなるんだからしかたがない。言い換えると、担当編集者が原稿に対して全然意見を言ってくれないようなひと(何を渡しても、右から左……というひと)だとたいへん困ることになる。百パーセントの完成品を渡している作家は、担当編集者がどんなひとであれ関係ないだろうが、私にとって担当編集者は一種の共同執筆者なのである(おいおい)。だから、担当さんとふたりで、渡した原稿についてあーだこーだ言っ、それを練りあげる(ときには破棄して書き直す)時間がなかったらダメなのである。それに、ぎりぎりに渡すということは、イラストレーターも困るし、ほかの仕事も抱えている担当編集者にも迷惑をかけることになり、気の弱い弱い性格の私はそういうことは怖くてできない。「笑酔亭梅寿」を小説すばるに連載していたときは、なにしろイラストが成瀬國晴さんという超大物だったので、吹けば飛ぶような将棋の駒的作家の勝手だしめきりを後らせる……なんてことは絶

対できず、しかも、あの仕事は、できあがった作品を月亭八天さんに読んでもらって、いろいろ直しを入れる、という作業の時間を確保する必要もあったので、ふつうの仕事よりもめっちゃめっちゃ早くとりかかり、めっちゃめっちゃ早く書きあげていた。ほんとですよ。成瀬さんがどれだけえらいかということ、一度など、私は作中に登場するミュージシャンを「アルトサックス奏者」と書いたのに、できあがってきたイラストは「テナーサックスを吹いていた。描き直してもらおうわけにもいかず（いや、頼んだら描きなおしてください）たとは思いますよ。でも、こっちの気持ちとしては、びびってしまって、描き直しを頼めなかったということですよ、原稿のほうを全部「サックス奏者」に直したのである。もちろん「おまえは作家としての矜持はないのか。イラストレーターに合わせるなんて本末転倒だ」という考えもあるだろう。そりゃそうです。

さて、作家になってから、こういうヤバイこと（綱渡り）は三度目ぐらいなのだが（ある長編を書いていたときは、どうしてもしめきりまでにできあがらない、と編集者に言ったら、もう人格を否定されるぐらいめっちゃめっちゃ叱られて、こっちもものすごく腹をたてて、死ぬ気でがんばったら、ありやまー、できあがってしまった、ということもあった。あとできくと、あれは愛の鞭だったらしい。たしかにあのあと、守るべきしめきりは守るようになったもんなあ……守れないものは守れないけど……。あと、一週間で百八十枚ぐらい書かきやならなくて、しかも、ネタができあがっておらず、走り書きのメモだけ持って、自主的にホテルに籠もったこともあったなあ。でも、あのときも結局、予定より早く書いてしまったのだった。俺って天才？、今回は本当にひとつぐらい落とすんじゃないか、あるいは本の発売が延期になるんじゃないかと思った。何度も「綱から落ちた」と思ったが、間一髪のところで助かり、なんとかこうやって最後までこぎつけることができたのだ。だいたい私はひとさまより筆が遅いので、ふつうの作家が五日あれば十分な仕事に十日もかかったりする。だから、起きてから寝るまで目一杯と働かないといけない。先輩作家と話をしている、

「田中くんはどれぐらい書くの」

ときかれ、

「。。。枚が精一杯ですね」

「ふーん、ばくもそのぐらいだね。なかなかそう書けるもんじゃないよねえ」

などと言うので、へー、このひと、もっと書いてると思ってたけど、案外少ないんだなあと安心していると、私は一日に。。。枚のつもりで言ったのに、向こうは一時間に、のつもりで言っていたとあとでわかってがっかりしたりする。

しかし、私は注文を断ったことは一度もない(いや、ほんとは一回だけある。それはしめきりの連打の最中に、五日後に短編一本、みたいな仕事で、どう考えても物理的にむりだったうえ、ほとんどお金にならない仕事だったので泣く泣く断ったが、いまだにあのとき断ったのを惜しいと思っている)。どんなに忙しくても、仕事を頼まれるといやとは言わない。いや、言えない。だって、それを断ると次が来ないかもしれないじゃないですか。こうやって自転車操業を重ねていって、個々の仕事のグレードが落ち、そのうちに誰も依頼しにこななくなるのだ。それはわかってはいるのだが、だって、「誰でもいいからこの仕事するひといる?」と言われたわけじゃなくて、嘘でも、「田中くん、こーゆー仕事があるんだけどやる?」と言われたわけでしょう? つまり、私を名指ししてくれて、あなたに仕事(ということはお金)をあげましようと言われたわけだから、これを断るのは馬鹿ですよ。誰が何と言おうと、あたしゃ絶対に絶対にぜーっーったいに仕事を断ったりいたしません。でも、なかには、タダの仕事もけっこーあるんだよね。「お金は出せませんが、書いてくれますか?」というやつ。実は、そういうのも断れない体質なのだ。月に二回やってるe-NOVELSのエッセイをはじめ、いろいろやってます。ときには「現物支給でいいですか」というのもある。CDのライナーノートとかなのだが、ライナーを書いたらそのCDを十枚くれるのだ。某レベルはいつもこれで、自分のCDじゃないんだから、一枚くれれば十分なのに、いつもドカーツと送ってきてくれる。このレベルなんかはいいほうで、なかには、ライナーを書いたのに、一枚も送ってこない会社もあって、知らないうちにレコード店に並んで、しかたなく自分で買ったりする。なぜかというところ、こういうところは催促しても、送ってこないのです。タダで書く

ようなやつに現物を送る必要はない、ということなのかもしれないが、せめて一枚は送ってくれ。この手のタダの仕事のほうで、お金をくれる仕事よりもめきりがきつかったり、何度も書き直しを要求されたり、相手が居丈高だったりするのはどうしてだろう（もちろんそういうところばかりじゃないけど）。しかも、取材が必要だったり、時間がすごくかかりたり……。そういえば、まえに我孫子さんも同じようなことを言っていたなあ。しかし、こういったタダの仕事も、なんか断れない。理由はさっきと同じで、私を名指しで言ってきたわけですからね。自分の書いたものが活字になるのなら、お金なんかいらさない、タダでも書きます！ というひともいるだろうが、私は一応、書いたものでお金をちょうだいして、それでなんとか一家を養っておるのだから、できるだけタダでは書きたくない。というか、できればいっぱいほしいお金がほしい。だから、時間をとられるタダの仕事はしないにこしたことはないのだが、電話がかかってきて、

「あなたにこれこれこういう文章をぜひ書いてほしい。ただし、お金は支払えないので無料をお願いします」と言われると、

「あ、はいはい、いいですよん」

と、ついつい口走ってしまうのだ。私も、小説以外の文章でお金をもらおうとはあまり思っていないし、べつにかまわないのだが、お金をもらえる仕事でめっちゃ忙しいときに、そういった仕事の催促の電話があつたりすると、イヤになるけど、まあ、有料であれ無料であれ、私をご指名してきたということは、

（俺って頼られてるんだな……）

と思ってしまうのである（嗚呼勘違い）。なかには、

「一円でもいいからお金をとるべきだ。それがプロってもんです」

とのたまう作家もいるが、私は、一円くれるぐらいなら、タダで書きます。こんなことを書くと、タダの仕事がどどどーっと来たりして。まあ、いいんですけど。

というわけで、皆さん、よくこんなならだらした愚痴につきあってくださいました。感謝いたします。えーと、最後に宣伝宣伝。綱渡り生活を続けたせいで、去年の十二月に「笑酔亭梅寿謎解晰」(集英社)を、今年の一月に「UMAハンター馬子完全版1」(ハヤカワ文庫)を、今月(二月)に「天岩屋戸の研究」(講談社ノベルス)を出すことができました。今月(二月)末には「UMAハンター馬子完全版2」(ハヤカワ文庫)がです。あと、もうじき出る雑誌「ミステリーズ!」(東京創元社)に「挑発する赤」という短編が載ってるし、「SFマガジン」(早川書房)では「罪火大戦ジャン・ゴレ」という長編を毎月連載しています。われながらよく働くなあ。でも、金はもつからんなあ……。皆さん、よろしくお願いいたします。

さて、こないだまで「上方落語の歴史」について語っていたので、次回からは「SFの歴史」について語るアカデミックなシリーズをはじめたいと思います。乞うご期待(といっても、一回で終わるかもしれないけどね)。じゃあ、また。

(了)